

入選

『色移り』

鈴木葵

「よーい、はじめ！」

1、2、3、4、5、6、7、8……。早口でよどみなく数え上げられていく数字達に、私たちはワッと一斉に四方へ散った。近所の同い年くらいの子どもたちと、もっぱら缶けりをすることが流行っていた、小学生時代。田舎というにはコンクリートが多く、都会というには田んぼが目立ちすぎる私の地元は、遊ぶ場所と言えれば家の横の田畑か、狭い土地に無理やり数だけを押し込んだような住宅密集地。それしかなかった。それしかなかったけれど、私たちにとってはそれ以外というものを知らなかったもので、それなりに退屈しない環境だった。

「15、16、17、18…」

さて、どこに隠れよう。キョロキョロ視線を左右に走らせながら、私は瞬時に考えを巡らせる。遊び慣れた土地だ。定番の隠れスポットなどお互いに知り尽くしている。家の近くは隠れるところは多いけど、鬼から見つかりにくい代わりに、こちらからも鬼の動向が探りにくくて不安になる。畑は隠れられるところは少ないが、見つかっても素早くスタートダッシュを切れるから、ひょっとしたら鬼より先に缶を蹴飛ばしに行けるかもしれない。ああでも、今日の鬼はカズくん。足が速いから、きっと私は負けてしまう……。

「24、25、26…」

ああもう時間がない！私はとっさに、家と家の隙間……身体を横にしてカニさん歩きをすればやっと通れるような、細い細い隙間にパッと急いで飛び込んだ。エアコンの室外機が邪魔だったが、それを乗り越えて屈んでしまえば、ちょうど身体もすっぽり隠れて見えなくなる。けど、今までにも何度か隠れたことのある場所だから、カズくんにはバレてしまうかもしれない。

「30！」

決められた数を数え終わったカズくんが、パッと顔をあげて立ち上がる。ドキドキしながら息を潜める私は、見つかるんじゃないかと気が気ではなかったけれど、カズくんは私の方には目もくれず、一目散に反対側へと駆けていった。どうやら畑に狙いを定めたようだ。ほっと安堵のため息を吐き出した私は、少しリラックスして身体の位置を整えた。

「痛っ。」

ザリッ。身じろぎした途端、むき出しの日焼けした腕に引っかかれたような不快な感覚が走って、私は思わず顔をしかめた。狭いこの壁の間は、実は私の家と、お隣さんの家の隙間だ。目の前の見慣れた家の壁は表面がザラザラしていて、触れるとチクチクした固い感触を手に伝えた。こんなにザラザラしていたら、肌に擦れて痛いのに。もっとツルツルしていたら、きっとチョークで絵だって描けたのに。だいたい、私は汚いねずみ色のこの壁が好きじゃない。こんなの全然かわいくない。むう、と不満に思いながら、暇になった私は壁の間を、奥の方奥の方へと進んで行った。

狭い壁の間はお日さまの光も少なく、なんだか静かでひんやりしている。上を見上げれば、いつも玄関の前から見ている家より、壁の色が濃くて黒っぽい。お日さまに当たらなかった方が日焼けするなんて、変なの……。

「葵ちゃん、みつけ！」

首を傾げて切り取られた狭い空を見上げていたら、突然聞こえた元気な声にハッとした。しまった！慌てて壁の間から這い出そうと、ズリズリ身体を擦りながら飛び出たけれどもう遅い。カン、と軽快な音を立てて誇らしげに踏まれた缶に、私はあーあ、とがっくりと肩を落としたのだった。

「葵、汚れたなあ。どこで遊んで来たん？」

夕方になって、私を見た母が呆れた声を出した。

「家の横んところ、入ってたら汚れたん。」

私は拗ねたように唇を尖らせながら、ぶすっと不細工な顔でそれに答える。お気に入りのピンクのTシャツ。それが、お腹の辺りが何だか灰色っぽく焦けていて、色が抜け落ちたかのように汚れていたのだ。

「壁の色が移ったんやなあ。もう古なってきたから。」

そろそろ塗り替えやなあ、洗とくから出しといて。そんな母の言葉なんか聞こえずに、私はこの上なく不機嫌だった。私の好きなTシャツが汚れてしまった。ピンク色で、かわいかったのに。あの壁のねずみ色が移ったからだ。最悪。もう絶対缶けりであそこには隠れない。

すっかりいじけてしまった私を見かねたのだろうか。その日の晩になって、やれやれと肩をすくめた母が、私のところまでやってきて、囁いた。

「葵ちゃん、あのね、こういうのはどうやろう……」

「わあ！」

数ヶ月後。私は自分の家を見上げながら、顔いっぱいの笑顔を浮かべた。

「きれい！」

まるで桜みたいに、淡くてかわいい、ピンク色。住み慣れた自分の家のはずなのに、全然知らない家に思えた。外壁の塗装工事を終えた我が家は、以前の地味なねずみ色が見違えるように明るくなった。興奮した私は、ちろちろ家の周りを走り回って、また家の横の隙間に潜り込んだ。

手で触れると、壁はやっぱりザラリとしていて、けれど表面がツヤのある生クリームみたいなピンク色だったから。最早そんなことは全く気にもならなかった。

「色、換えっこしたね。」

きっと私の T シャツが壁の色を吸っちゃったから、壁も私の T シャツの色を吸ったんだ。

新しく生まれ変わった家を見上げて、私はふへ、と満足げに微笑んだ。